軍人覚悟一夕話

赤松連城

017662-000-3

特53-598

軍人覚悟一夕話

赤松　連城／著

M28. 3

ABF-0561

0-12

178
4
295

軍人覺悟一夕話

全

松連城述

京都 眞宗傳道會

特53
598

軍人覺悟一夕話

眞宗末學　赤松連城述

征清の軍旗を翻して、連戰連捷我帝國の威光を發揚すること、天皇陛下の御稜威に、軍人の忠實勇武なる死を、勿論なれども、皇國の精神躍々として、煥發するに、祝すべき歸るが如き、なしと、昨年十月のころ、一軍人突然來て、余が寓居を訪ひ、所謂一場の法話を爲し

たりしに、頃日傳道會員余をして其法話を筆錄せしめ、一小冊子として從軍の諸士に贈らんとす。思ふに、唯是一時の談話にして盡さゞる所多しと雖、寸分にても軍人の精神を養ふに裨補あらば、亦余が報國の微衷を表するに足らん乎。

一軍人來りて余に告げていふやう、今回征清の事起りしより、今か〳〵と待ち居たるに、いよ〳〵召集の命下りたれば遠からず彼地におもむくべし。抑、軍人たる者は、義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕し

と覺悟せよとの　勅諭を奉じ、常にこれを忘れざれば、今日の事は、もとより覺悟する所にして、聊も顧慮することなし。但宗教を信ずる者は特に死生の際に臨みて其心安泰なりといふ、某平生宗教を聞かざるにあらねど信根いまだ深からず、願はくは子これを誨へよ、且時期も迫りたれば簡易に切實にこれを示されたし。

余之に答へていはく、善哉〳〵子の問ふこと、子既に勅諭の旨趣を奉戴し覺悟をさだめ居れりといへ

り、覺悟の二字は、勅諭にも掲げたまへる語にして最大切なることなれば、この覺悟の二字につきて佛教の一端を述ぶべし。抑、佛教に心を傾る者誰か佛陀を尊ばざらん、誰か佛果に至ることを望まざらん、しかるに佛とは、いかなる者ぞとたづぬるに、涅槃經には佛者名覺卽自覺悟復能覺他と說きたまへり覺とは夢の覺めたることにて、悟とは迷の盡きたる事なり、何事にもあれ夢の中にありて、事の前後もさだかならず、その是非も明かならぬやうにては、是すな

はち迷ひにて、大事に臨みて決することと能はざるなり、この迷夢を覺破して、事に臨みて疑ひ惑ふところなきを覺悟といふなれば、古くより將來の大事に向ひて決心するをすべて覺悟といひ習はせるは、我御國に佛教の久しく行はれ日用の語となりたる一例ともいふべし。それは兎もあれ今吾人の迷ふ所の最大なるは死生の際にあるべし、これを覺悟し吾人を教へて覺悟せしめたまふ者、卽ち佛陀の御教なれば、佛教を信ずる者、死生の際に臨みて其心安泰なるべ

きは道理必然といふべし。

吾人の一生を五十年乃至百年とす、生の前に生なくして生は万事の始なるか、死後に生なくして死は万事の終なるか、若又生前に生あらば從來する所は何れなるや、死後に生あらば趣向する所は何れなるや、古人の語にも顧過去冥々不見其首臨未來浩々不尋其尾といへり、大經の中には愚痴朦昧而自以智慧不知所從來死所趣向と戒めたまへり、朦昧にして明了ならざる、迷夢の覺めざるが故なり、若果し

て生前始なく死後終なく悠久にして限なければ、吾人たとひ百年の壽を保つとも、たゞ是一瞬の間にして、かの盧生が一炊の間に百年の榮枯盛衰を夢みたると同じ、東坡居士の哀吾生之須臾といひたるも理なり、亦復前世後世の朦昧にして知ることなきのみならず、自ら見聞する現世の事、條理あるか亦條理なきか、靜に之を觀ずれば、事の起るは必その因あり、事の成るは必其果あり、因果秩序あれば條理ありといふべし、而して其因果知るべからざること多し、賢明

の人も遂に貧賤を免れざるは何の原因によるか、愚昧の者も或は富貴を享くるは何の結果なるか、全を求めて毀を得る者あれば、虞らざる譽を受る者もあり、能く幾を知ると謂ふ人も往々失敗を免れざるは、條理の知ること難くして、猶夢の中に見る所事物錯雜して起滅常なきが如くなるに同じ、又この一生始あれば終あり、遂に死に歸する事は皆人の知る所なるに、猶いつまでも生きながらへんとて、これが爲に身を勞し心を苦むるも亦迷へりといふべし、或は世

の中の顯象一として遷移せざる者なきを、常住なりと思ふは常見なり、或は因果相續して連鎖の如なるを、因なし果なしと思ふは斷見なり、皆是條理を顚倒せる妄見なれば、迷夢にあらずして何とかいはん、李白が處世若大夢といひしは、いかに此世界を觀せしか、我佛世尊は未得眞覺常處夢中故佛說爲生死長夜と說き示したまへり。

上にいふところは吾人迷夢の相なり、これを覺悟せずして死生の際に臨むは甚不安心なる事なり、死生

は人の大事とする所、これを賭て疑はざる、實に天晴の覺悟なり、俗に一生懸命とも命がけともいふは心のまことを顯す所にして、悠々不斷の事にはあらず、さて此死生の大事ちゞめていへば死の一字、人はいかに之を解釋する乎、解釋することなくして徒らに死を恐るゝは常人の情にして怯者の迷なり、又たゞ事に臨て死を恐れずといふとも、此大事を解釋することなき者は、猶是勇者の迷にして眞の覺悟には非るなり、史記に貪夫徇利烈士徇名とか見へたり、商賈

の危險なる風浪を冒して奇利を得んが爲に航海するが如きは、死を輕んずるに似たりといへども、其目的もとより生にあれば、万死を賭て一生を僥倖する、即ち利に徇する者にして、甘じて死に就くの覺悟にはあらず、烈士は然らず、豹は死して皮を留め人は死して名を留む、今若死を恐るゝ爲にこの事を行はざれば他の誹謗をのがるゝ事なし、一死以て美名を留むべしと、是利に徇ずるの貪夫とは水火の異ありと雖、其名を後世に留るは、自の爲にするか、他の爲にす

るか茫然として明ならざれば、是亦迷なり、これに勝る者は、孟子に所謂以身殉道これなり、道とは何ぞや、仁なり義なり、人の道なり、身を殺さゞれば仁を成す事能はず、生を舍てざれば義を取る事能はず、こゝに於て一身を舍て一死を惜まず、以て仁義の道を行ひ、自ら仁義の人となりて斯道を千載に傳へんとす、古來の忠臣義士皆この志を以て死に處する、天晴の覺悟なり。しかれども其死は万事の終にして、未來の覺悟を知らざる者は、佛教よりこれを觀れば生死の迷

夢を覺破したる者とはいひ難し、孔子の説と雖、始を原し終に反る故に死生の説を知るといふ、必しも死を以て万事の終とするに非ざるに似たり、況や如此なれば、自ら心中に死の一字を觀ずるに、寂寞悲愴の感あるべし、決心たゞ是消極的にして能事畢矣といふに止まる。

然るに我佛教によれば、死は永く死するにはあらず、後生に趣向して相續して盡る事なし、是猶生滅の迷妄なり、若能く迷夢を覺破して涅槃の圓覺に達悟す

るときは不生不滅にして常住安樂なり、この圓覺は獨自ら覺悟するのみにあらず、亦能く他を覺悟し、盡未來際の事業として廣く十方一切の衆生を濟度し悉く此圓覺を證悟せしむるなり、世人皆かもへらく、佛者は生死を怖るゝ耳と、佛者は生死の怖るべきを覺り圓覺の歡ぶべきを悟る、而して能く生死を怖れず涅槃を愛せざるの大覺悟に達するなり、人よく此教を信じて說の如く修行し、これを以て死の一字を觀ずれば、寂寞なる者にあらず、悲愴なる者にもあらず、

死の一字卽ち樂土に至るの初步、涅槃に達するの起點なり、此の如く決心すれば其快きこと限りなかるべし、當て快の字を解說したることあり、快は心に从ひ夬に从ふ、快の字と反對なり、快は央に从ふ心中央にあり、右せんか左せんか、進まんか退かんか、猶豫して定らず、故に快々として樂まざるなり、これに反して一方に決すれば、猶豫するところなく躊躇する所なし、故に愉快なり、消極的に能事畢矣と決心するも、猶豫不定の人に勝ること万々なれば、快心なきにあ

らずと雖、わが佛教を信じ前途多望なる積極的の決心の大快樂には及ばざるなり。しかれば佛教を信ずる人は死生の大事に於て決心して疑ふことなく、死を以て涅槃の覺悟に達すると心得れば、勅諭に宣はせ給ふ死は鴻毛の如しと覺悟することを得る、眞に快樂の妙味ありと知るべし。

軍人のいはく覺悟の說をきゝて、心中死の怖るべからざるのみにあらず大に快樂を得べきを覺ふ、但死の一字卽ち樂土に至るの初歩涅槃に達するの起点となるは如說修行の人にあるべし、某もとより修行の方法を知らず、況や身已に戰に臨む、修行の餘暇なし、嘗て聞く易行易修の法ありと、請ふ爲にこれを示されよ。

余曰く子のいふところ最肝要なり。抑、佛教に門多く流派一にあらずと雖、その目的は上にいふところの迷を轉じ悟を開くの外なし、故に皆その修行の方法を敎ふ、是機緣同じからず千差万別なるが故に、之に應ずるに難易漸頓あるなり、子が今日の境遇に的當

する者は時日を費さゞる頓悟の法なるべし、昔者楠公正成、湊川に於て戰死せられし前日に、明極禪師を訪ひて大覺悟を決せられしは禪家自力の頓悟なり、余の傳ふる所は眞宗他力の法門にして頓極頓速の利益あるのみにならず、易行易修いかなる時機にも相應す、今略してこれを述べん、意を注めて眛ひたまへ。其法とはたゞ念佛なり、念佛とは南無阿彌陀佛の六字の名號にして、世人は之を口に稱ふるのみを以て足れりとすれども、この名號の義意を聞信せされ

ば覺悟の益を得べからず、若その義意を聞きて疑ふ心なき者は、即ち名號を信受すると名づけ、未口に稱へざるに既に往生の大事を成辨し涅槃常樂の覺悟を證すべきことを決定す、是を一念發起して正定聚に入るといふ、其時忽ち命終るときは直に涅槃常樂の覺悟を得べし、若猶人世にながらへば行住坐臥に常に怠らず其聞持したる名號即ち南無阿彌陀佛を稱へて佛の恩德を報ずるのみ、其法至易にして功德圓滿し時日を費さずして利益頓速なり、何をか六字

名號の義といふや、抑、南無阿彌陀佛といふは、印度の語にして、漢字に譯しては、南無を歸命といひ、阿彌陀佛を無量壽覺といふ、歸命といふは、歸は歸依歸順と熟し、命は敎命命令と熟す、合すれば命令に歸順するを歸命といふ、是即ち信心のことなり、次に無量壽覺といふは、上に述たる生死の迷夢を覺破したまへる佛にして、不生不滅なれば無量壽と名づく、常住にして易ることなく、未來際を盡して際限あることなし、是を壽命無量の德といふ、亦是佛の大悲心眞實にして、かはることなきなり、又この佛を無量光と名づく、光明とは愚痴の迷闇を照破したまふ智慧にして、無邊無際なれば無量光と名く、十方に遍滿して至らざる所なし、是を光明無量の德といふ、亦是佛の大悲心無礙にしてあまねきなり、阿彌陀佛は此の如き光明無量壽命無量の德を成就したまふ、是自覺なり、而て我等一切衆生の生死海中に沈沒し顚倒の迷夢に苦惱するを憐愍悲哀したまひ、願を發し行を修し、其願行の功德を以て名號の中に攝めて、之を我等衆生に回

向したまふ、回向といふは、佛の所有の功德を衆生に施し與へたまふをいふなり、而して之を信受する衆生をして亦光明無量壽命無量の覺悟を得せしめたまふ、是覺他なり、此の如き自覺々他圓滿せる者卽ち阿彌陀佛の四字なり、しかれば、南無阿彌陀佛といへる六字は、佛の方よりいふときは、南無と歸命する衆生を阿彌陀佛のかならず攝護したまふといふこゝろなれば、我等は聊も自力の修行をもちひず、ひたすらに佛のあまねくしてかはることなき大慈悲の御心

を仰ぎ、その命令に歸順して、疑ふことあるべからず、この信心卽ち名號を聞持し信受する相なれば、南無阿彌陀佛の六字は、衆生の方よりいふときは、阿彌陀佛に南無し奉るといふこゝろにして、信心といふも六字の外にはあらざるなり。此上に稱へあらはす念佛は、心に信ずるところ自ら口に出る者なれば、たゞ廣大なる佛恩を謝するにあり、是を眞宗念佛の法門といふ、持ち易く修し易し、子これをいかにとかおもふ。

軍人の曰く、六字名號の義意委しく承りたり、いかやうにこれを信じて安心の地に至るべきや。

余曰く、眞宗にては信心の外に安心なし、上にいふところの歸命の二字即ち信心なり、即ち安心なり、子は軍人なれば子の知るところを以てたとふべし、軍人は命令に服從するを第一の務とすと聞けり、即ち大元帥陛下の勅諭を服膺し、長官の命令に服從すれば、一左一右すべて私意を狹まず、いかなる危地に臨むとも一身を顧みざる、是を忠實勇武といふ、今我

等衆生生死の大海を度り涅槃の彼岸に達する事は、自力の能くする所にあらざることを知り、阿彌陀佛の大悲願力をたのむ、佛已に他力回向の本願を成就したまへば、聊も自力のはからひを狹むべからず、阿彌陀佛は一心正念にして直に來れ我能く汝を護らんとの敎命を下したまへり、釋迦如來傳燈の知識は、その敎命に違ふことなれと勸發せり、この際に於て遲疑し怯退する者は彼岸に達することを能はず、必須く自力をすてゝ他力に歸順すべし、一たび佛の願力

に歸すれば、佛心卽ち行者の心となる、これを佛心と凡心と一体になるともいへり、既に佛心を領すれば動靜おのれにあらず、佛の行を行ずるなり、何ぞ佛果を得ざらんや、生死をはなれて涅槃に至ること目前にあり、たとひ艱難の身に逼るも、一世の勤苦は須臾の間なり後に無量壽佛國に生じて快樂極りなしと思ひて、よくこれを忍ぶ事を得べし、其心自ら安泰なれば安心といひ、傾動することなければ決定といふ。

子すでに　陛下の　聖勅を服膺し忠實勇武の人となれり、更に佛陀の教命に歸順して安心決定の人とならば、たとひ彈丸に身を斃すとも、美名を現世に留め妙果を來世に證すべし、豈二世の覺悟を全くするにあらずや。

軍人曰く、某もとより死は鴻毛よりも輕しと覺悟せり、今子の教をきゝて死は妙果に達するの初歩なりと覺悟せり、請ふこれを實地にあらはさんと、泰然として辭し去れり。

軍人覺悟 終

明治二十八年二月二十四日印刷
明治二十八年三月一十日發行

著者 赤松連平
京都市下京區朝鮮西洞院東入
上ノ水町拾貳番戶

發行者 松田善六
同 油小路花屋町上ル西若松町
第三拾四番戶

印刷者 山本廣三
同 五條通西洞院東入西燈籠町
第六番戶(印刷所)

發行所 眞宗傳道會

軍人覺悟 終

明治二十八年二月二十四日 印刷
明治二十八年三月 十 日 發行

著作者 京都市下京區烏丸通西洞院東入蛸子木町第拾弐番戸 赤松蓮城

發行者 同 油小路花屋町上ル西若松町第三拾四番戸 松田善六

印刷者 同 五條通西洞院東入西堂屋町第六番戸(印刷所) 山本廣三

發行所 眞宗傳道會

8